

言葉につながるふるさと

藤村は昭和十八年に七十一才でなくなっているが、晩年までいかに愛郷心を抱いていたかを、この言葉は今でも私たちに語りかけてくれる。  
(いわき市教育委員会社会教育委員)

## とにかく十年

松澤 肇



会津にやって来てようやく三年。高校卒業の時から数えれば、故郷を離れでは十年がたとうとしている。

東京に六年(大学浪人・就職浪人一年ズツハ、親二ハ厄介ナ話ダツタロウ)故郷で一年、そしてやって来た会津でもう三年。いつの間にか二十八歳になってしまった。思えば大学入試に失敗してフラッと九州一周の旅に出かけた時がそもそも始まりだったような気がする。

以来十年。頼りなくも故郷を離れて名前ばかりは世帯主となり、いろいろな方のお世話になりながら、どうにかこうにかこの奥会津の地で人らしく暮らせるようになった。根がついてきた。そんな気がする。

知らない土地、知らない人々。それにしては会津という土地は妙に懐しい。

全国に知られた歴史のある土地だからなのか(そう言えば、就職面接に行つた生徒たちに聞くと、なまじの地名を言うより「会津」と言つた方が通りが良いそうだ、よく言う会津の気風・人情のせいなのか、あるいは雪深く空の狭い山国の小さな高校に、県下全域から集まつた様々な人たちが肩寄せ合つてがんばっている職場だからなのか、不思議な事にこの三年、ついぞ会津を嫌だとか、来るんじやなかったかと思つた事がない(ナニシロコノ土地デ結婚マデシテシマツタ)。むしろ下宿住まいであるとか、社会人風のつきあいであるとか、苦手だったり嫌だったりした事が、この土地に来て意外にスムーズに処理できるようになつた事に、自分自信驚いているくらいなのだ。そういう年齢・そういう時期と言われてしまえばそれまでだが、そんな意味でこの土地は私のターニングポイントのよう気がする。だんだんに根つこが伸びていく感じとでもいうのか、故郷を離れて十年の根無草のような生き方が、どうやら一段落しそうな感じなのだ。

現在私は自家用車にのつて片道数十キロメートル余の道のりを毎日通勤している。「日々旅にして旅をすみかとする」ような生活をしながらさほど苦痛にも感じられないのは、これが日常だからなのだろう。一年前の私には、これだけの長い自家用車での道のりは

かなりたつぷりしたものであつたし、それなりに刺激的なものであつた筈だ。

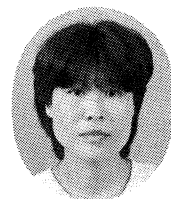
それと同様に、一年前には私には荷がかりすぎないように思われた事、些細な事ながらも思わず動揺してしまつたような事どもが、今ではさほどのインパクトを持ち得なくなつてきている。教壇に立つようになってようやく四年。

日々、様々に起きる出来事が、日常的な当然の出来事として受けとめられるようになってきたという事なのだろうか。驚かされる事、困難を感じる事、激してしまふ事、今だつて毎日起きてはいるけれども、以前とは少し変わつてきている点は、何とはない余裕、これにつきるように思われる。あわてながらも、とまどいながらも、何とかやるだろうと思えるようになってきたのだから、これは相当な事なのではないだろうか。もつともそう思えるようになって最大の原因は、うちの高校が非常に落ち着いているからなのだろうが。昨春、初めて学級を持った。男女合わせて三十五名。この子たちとの出会いも、私を変えてくれた大きな要因と考へても良いだろう。護るべきもの、扱つて立つべき所を得て腰が定まつたような気がする。もしかすると、こちらの方が最大の原因なのかもしれない。

とにかく十年。根無草のような、行きずりの旅行者のような生活が終わりつつあるのを感じながら、この九月、私は子供たちと一諸に初めての修学旅行へ行く。  
(川口高等学校教諭)

## 心のぜいたくを求めて

前田 喜代子



人は年を重ねるごとに穏やかさを増すといいますが、時として子どもたちの騒ぐ声にいらだちを覚え、「今日の先生はご気嫌ななめ」と感じさせてしまう私。美しい物に感動し、ゆとりを持つておおらかに過ごしたいと思ひながらも、何かにせきたてられるかのように、あたふたと過ごしてしまふ。とても大切なことには目をつぶり、目先のことだけにとらわれがちな自分、幼児教育者として自責の念にかられることの多いこの頃です。

そんな私に、思いやりの気持ちや感動する心を取り戻し、つぎはぎだらけで今にも切れそうな心をいやし、活力を与えてくれるもの、また、どんな人をも素直で、素朴な気持ちにしてしまふもの――それが旅だと思ひのです。

独身時代、一人旅に憧れながらも、心配症で、憶病な私はい経験できずじまいでした。年一回は旅をしようとい互いに忙しいスケジュールを考慮し、主人との二人旅を始めて五年になります。その中で、一年目の修善寺への旅